

原子力の哲学

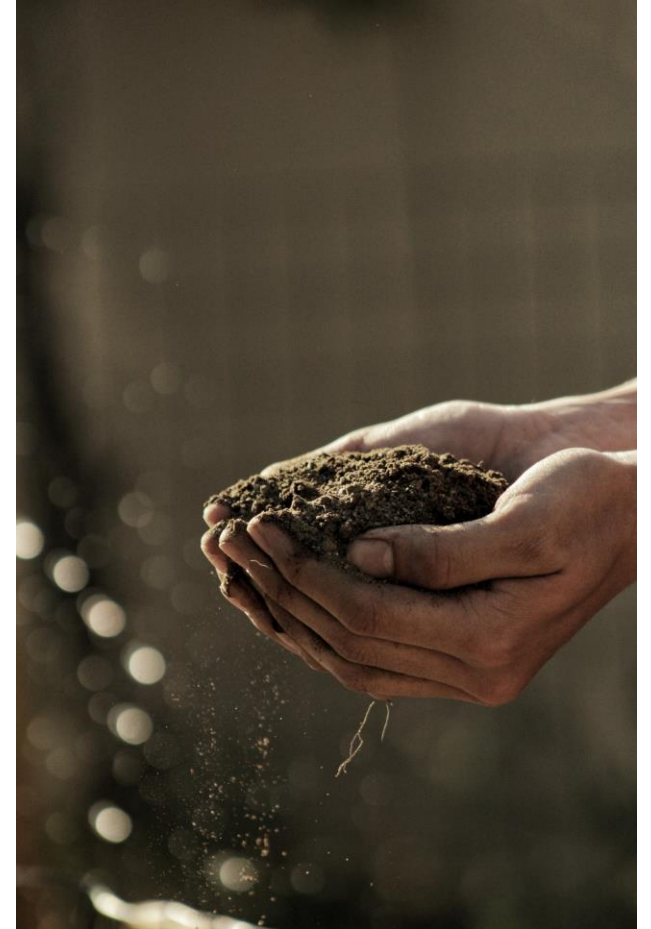
関西外国語大学
戸谷 洋志

toya-h@kansaigaidai.ac.jp

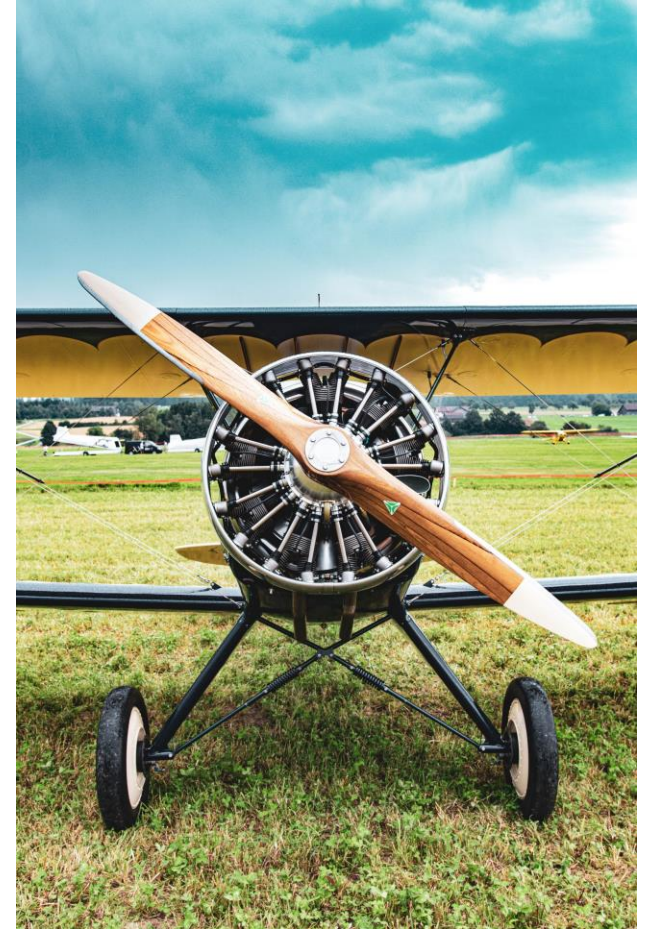
哲学における原子力の問題

- 哲学の議論のなかで原子力が論じられるのは20世紀半ば以降
- 原子力は、人間と技術あるいは自然の関係の変化を代表するものとして論じられた
- 哲学者は、そうした変化が**人間の条件**にどのような影響を及ぼすかを考察した
- こうした変化は、原子力の出現以前から潜在的に進行してきたものであり、原子力によって初めて表面化したに過ぎない → 原子力が提起する問題の本質は、原子力そのものにあるのではない
- 原子力は、人間と技術あるいは自然の関係を**象徴**するものとして、人間が置かれている状況を理解可能にする技術として、論じられた

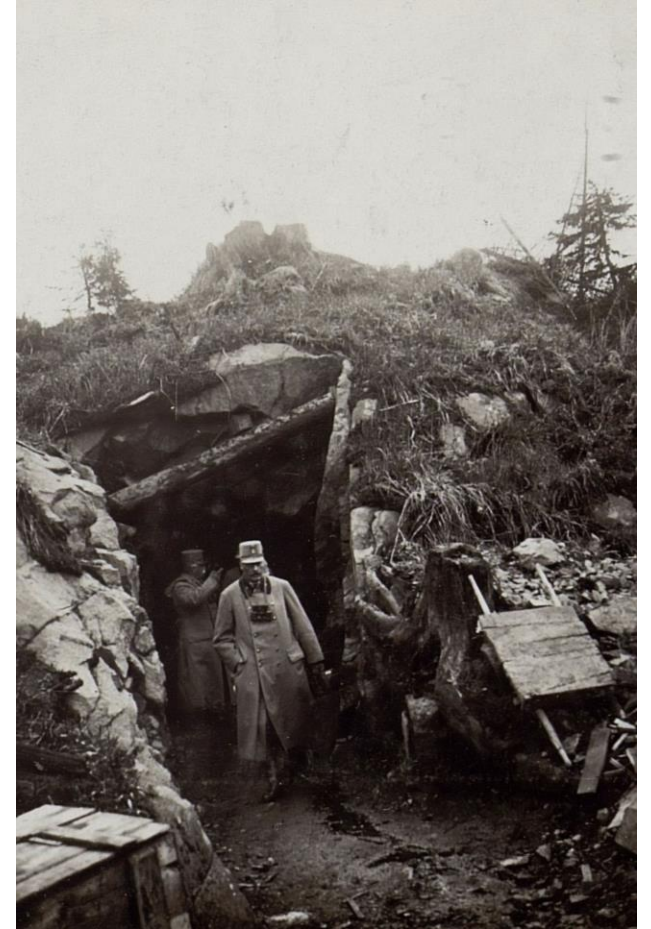
- 技術は知性の営みで最下層（アリストテレス）
- 人間の技術を自然の模倣を理想とした
- 自然は人間よりも優れていると見なされた



- 技術（実験）が知性の営みを主導（ベーコン）
- 人間は技術によって自然の本性を解明する
- 自然は人間の技術によって支配される

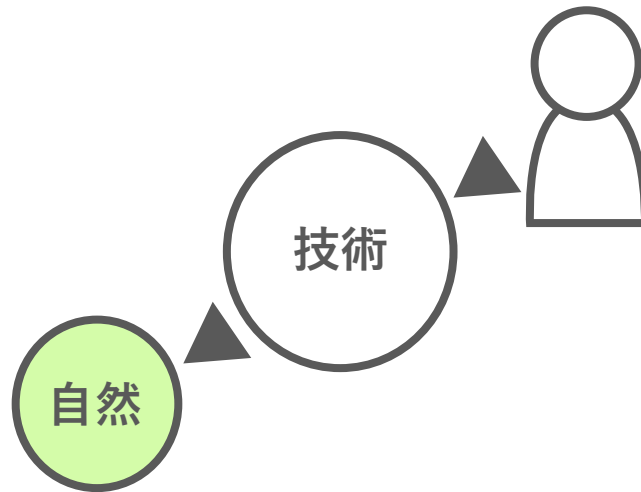


- 技術は知性を奪い、人間を野蛮にする(アドルノ)
- 技術は自然だけでなく、人間の本性を支配する
- 技術は自然を破壊する力を持つ



哲学史の中の自然と技術 比較

古代	近代	現代
自然が人間を支配する	人間の技術が自然を支配する	技術が人間も自然も支配する



『原子力の哲学』の概要

- 『原子力の哲学』では、マルティン・ハイデガー、
ギュンター・アンダース、ハンナ・アーレント、ハン
ス・ヨナス、ジャック・デリダ、ジャン＝ピエール・
デュピュイの7名を取り上げた
- 各章でそれぞれの哲学者の原子力に関する議論を概観
しながら、それらを相互に比較し、思想史的な連関を
明らかにした



原子力の脅威をめぐる議論には、核兵器か原子力発電を対象とするものが区分される

1

核兵器をめぐる思想

- 原子力は生命を絶滅させるからこそ脅威である(ヤスパース、アンダース)
- 核戦争は生命だけでなく、あらゆる記録物を破壊し、記憶そのものも破壊してしまう(デリダ)
- 記憶が破壊されうることによって、公共性における自由の発揮が妨げられる(アーレント)

2

原子力発電をめぐる思想

- 平和な原子力技術は、平和であるがゆえに、その潜在的な脅威を理解できない(ヨナス)
- たとえ明白な脅威が迫っていないのだとしても、その脅威を熟慮できなくなっている事態そのものが、脅威である(ハイデガー)

原子力の脅威に自然科学的な知識だけで対応することはできない

1

自然科学的な予測の限界

- 未来の人間の行動まで予測することはできない（ヨナス）
- 原子力による破局は、計算可能性を破り、まるで偶然起こったかのように生起する（デリダ）

2

人間の理解力の限界

- たとえ破局が予測されたとしても、人間にはそれを信じることができない（デュピュイ）
- なぜなら原子力の破局は、人間の想像力を逸するほどに、巨大だから（アンダース）

3

規範性の欠落

- 科学的な予測はそれだけでは規範性を帯びていない（アーレント）
- 予測そのものから科学的に倫理的判断を導き出すことはできない（ヤスパース）

原子力の脅威への抵抗

1

領域横断的な対話

- 自分とは異なる立場の人々と市民として対話すべき（アーレント）
- 議論を交わすことによって共同性を形成していくべき（ヤスパース）
- 敵対的な立場の人々の間でも対話が交わされなければならない（デリダ）

2

想像力の拡大

- 原子力の破局の大きさを理解できるよう想像力を拡大する必要がある（アンダース・ヨナス）
- 突如起こる破局を理解できるよう、想像力を拡大する必要がある（デュピュイ）

3

落ち着いた態度を取り戻すこと

- 性急に是非を決めつけるのではなく、落ち着いて熟慮する余裕をもつ（ハイデガー）

- 21世紀は原子力をめぐる動向が新たな局面を見せている
 - 気候変動への効果的な対処としての原子力発電に世界的な注目
 - ロシアによるウクライナ進攻に伴う、核戦争への緊張の高まり
- これらが、20世紀の問題の反復なのか、それとも新たな議論を喚起しているのか
- → 私たちの置かれている人間の社会的条件が、20世紀と21世紀との間でどの程度変化したのか否かによって、判定されるべきである

日本社会が直面する社会課題としての未来世代への責任

- 現在の日本社会が原子力をめぐって直面しているもっとも緊急度の高い課題は、放射性廃棄物の最終処分場建設に伴う、未来世代への責任であると考えられる
- 高レベル放射性廃棄物の放射線量が自然放射線レベルにまで低下するのは10万年かかる
→ 最終処分場建設は、10万年先の未来におよぶ責任を、現在世代に課す
- しかし、それほど長期に及ぶ未来への責任は、これまでの人間の社会的条件では考えられなかったものであり、したがって直観的にこの責任をイメージすること自体が困難 → 国民的合意の形成の困難さ
- 横断的な対話を継続し、想像力を拡大するための施策を講じ、落ち着いた態度を保ちながら、課題の解決に取り組む必要がある

ご清聴ありがとうございました